
Jewely-宝石-

梨仔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Jewelry - 宝石 -

【Nコード】

N0089I

【作者名】

梨仔

【あらすじ】

主人公沙優は幼馴染みの実から告白されるがためらってしまふ。そのうち実が…

幼馴染み

『あつ…あつたあ!!』

必死に勉強して受かった。N学。頭はそこそこ。
全部普通の快適な学校。

おざわあくあ
小澤亜久阿今年からN学生。高1。

身長は160センチと小さめ。

『実は!!??』

実と言うのは幼馴染みの
しまだみのる
嶋田実

同じく今年からN学生。

高1。と言う事なので…

『受かった!!』

私、亜久阿と実の高校生活が始まる…――

キンコンカンコン…

ガラッ!!!!!!

うわぁ…

さすがN学。皆チャライ!!

まあ私は地毛茶髪だけど!!私の席は窓側の真ん中。
大好きな席になった。

ガタン。静かに座り携帯を開く。パカッ。ヴーヴーヴー！！ブザー
がなりびつくりした私は大きな音を立て、なんと注目を浴びてしま
った。『はっ…はは…（うー！逃げ出したい！）』

苦笑いをその場に残して
教室をでた。着信相手は
実だった。

『実！？何組！？』

寂しいのか焦ってるのか。自分でもわからなかった。私のクラスは
1-C。実はF組だった為校舎が違ったが

私は走って実の元へ駆け出した…——『みつ実うー！！！！もお
疲れたあ…』

実の腕の中はほっとして
すごく楽になれる。

『ふーん。そっちはそういう関係？笑』

見ていたのは黒髪に背高の男子。『はっ！？そういう！？』実の顔
が真っ赤に染まる。『実？』『肉体関係？笑』なっ何この人…！

幼馴染み（後書き）

ここまで読んでいただき
嬉しいです。

ありがとうございました。

亜久阿の涙

『は?? 肉体関係??』

私には全然意味すら

わからなかった。

すると背高の男の子は

こう言った。

『うーん… しいて言えば体だけの関係♪♪』

ブッチーン…。

私の中で何かが切れた。

パチンツ!!!!!!!!!!!!!!

『わっ… 私と実の事を悪く言うなんて許せないっ!!! 私だけなら
まだしも… 実を悪く言わないで!!!!!! いつだって私に味方してく
れた。だから許せないっ!!! 許さない!!!!!!』すべて言い終わっ
た私の目には涙でいっぱいでも度々頬をつたっていた。何も考えて
なくて。でも実を悪く言うのは許せなくて。ただ言う事でいっぱい
いっぱいはいっぱい…。

その時に実が初めて口をひらく。『亜久阿。俺…。』実は頬をつた
る涙を拭いてこう言った。

『亜久阿… 好きなんだ。亜久阿の事が付き合って。』実の顔はいつ
になく真剣でいかにも冗談には見えなかった。『か… 考えてみる』
すぐに断るのは嫌だった。『うん。じゃあもう帰りな? 自分のクラ
ス。』

実は優しくそう言う教室まで送ってくれた。

『じゃあ… 帰りね…』

『おーちゃんとやれよ。』そう言い残し実は帰った。気が重いなあ

…

ガラッ!!

私は携帯を残した席に座り携帯を開く。

一通メールがきていた。

実

Re:

「本文」

さつきはさごめんな…

『小澤！！』先生に呼ばれすぐに携帯を閉じた。

『あつ！初めまして！！小澤亜久阿です！』

私がメールを見ようとすると自己紹介が始まっていて私の番だった。後ろの席の子の番が終わり話し掛けてきた。衣宇と言った。

衣宇はすごくハイテンションで付いていくのが大変そうだけど私も静かじゃないのでちょうどよかった。

『あ！？亜久阿？かあわい↓！！！！』
背も案外小さめ？
本当かあわい↓ね！！！！髪は地毛茶髪？』

衣宇は質問攻めで正直すこし引いていた。衣宇はそれに気づいた様子。

『あつゴメンね！？衣宇こういう可愛い友達初めてだから…いつも衣宇みたいなパツキンの友達だから…』

『そっか…私クラスで浮いてるんだ。地毛茶髪でメイクもしてなくて制服も皆オシャレに着こなしてるのに私はそのまま。地味じゃん。みじめってゆうか…』

私は思ってたつもりの言葉がいつのまにか口に出していた。目の前にいた衣宇は泣いていた。

『そっ…んな事ないー』『衣宇ゴメンね。私は大丈夫だから』
そう言って私は前を向くけど衣宇は酷くなるばかり。

衣宇の彼氏。自分の気持ち

『衣宇？泣き止んで！！』

衣宇の本名は林衣宇はやしいうと言った。

そっついえばさっきのメール。途中でクラスの自己紹介に入っちゃったんだよね。パカッ。

実

「本文」

さっきはごめんな（ ー ）本気だからよろしくな！！

実より（ ー ）

本気かあ…

正直な話実は私にとっては幼馴染み。迷う。
とりあえず返事をする。

「本文」

ありがとう（ ー ）

ってかメール遅れて

ごめんね←←←←

見てたらクラスで自己紹介始まっちゃった（ρ|；）

うん　ちゃんとやれる！！

亜久阿より（　　）

パタン。ふわあ…

ふと窓を除くと運動場が見える。ちょうど実が走っていた。こけた！！

『ぶっ』思わず笑ってしまう。その時に見てくれたんだ。手を降つてくれたから私も早くふりかえす。

自然と笑みがこぼれる。

もしかしたら私も実を????自分の気持ちが読めないしわからなかった。

なんだろ。このドキドキ。なんか…モヤモヤする…。キーンコーン
カーンコーン

そんな事を考えていたら
チャイムがなった。

『ねえ?あつ君が見てたのって彼氏い?????』

『あつ君???!!』

『あくあ…あつくん。』

衣宇はさらっと言うと教室から私の手を引っ張りでる。『ねえ?F
組行こお　衣宇の彼氏が要るんだあ!!』なんか嫌な予感がした
けどそれは的中。

『さっさっきの!!!!!』『なあに?!知り合い?って恋どおし
たのよお?その頬』げっ衣宇ごめんなさい!私のせいなんですうー!
『友達とじゃれてたから』本名こくぼれん小久保恋と言う人は私をかばったの

かなんなのかそっけなく言い放した。

寶石

『そおなのぉ?』そつかぁ…ぢやなくて!!なんで恋君嘘ついたんだろっ…衣宇は不思議そうに恋を上目遣いで見ていた。

『そうだよ』その時恋君がチラツとこちらを向き言った。『さつきは悪かったな。よかつたら友達になんねえ?』と言いながら恋くんは手を出す。私も手を出し。『亜久阿です…よろしく。恋くん』実はそれを見ていた。『亜久阿』低いトーンの声に私は振り替える。正直顔が見れなかった。

『なっ何??』動揺見せつぷりの私には戸惑いを隠せない。その空気に耐えられなくなった私は衣宇に声を掛けた。『衣宇っ!!教室戻らない?』『えーもう???わかつたよぉ…ぢやあね恋』『……』無視??!!彼女なのに?!『じゃあな。亜久阿』頬をピンクに染めそう言う恋くんは凄く可愛くて。

『亜久阿…私…実くんが好きなの』そう衣宇が言ってきたのは告白を放置して

1週間が経った頃だった。『え??!!恋くんは?』

『だいぶ前にわかれた。お互い好きな子いるから別れようって。』

ほぉ…そうですかいな。『まあいいんじゃない?頑張って』『で

も…実くんは亜久阿じゃん…』そうだった。うちってば無神経すぎ…

『でっでも私は実じゃないし?!安心しなって!!』

その言葉を衣宇に残して私はF組へ行った。『実…いる?!』『実

なら屋上だけど。』私は急いで実のいる屋上へ向かった。

『みつあつ…あんっ…』

甘くエロイ声。なんだろ??『みつん…実う』

えっ…実?!!!

ガチャン!!

やばっ…私はすぐに隠れる。『実ぢやあね』

女の子はこちらに気づかずに通りすぎた。ムカムカする。なんで?

？この前から実にムカムカする。モヤモヤする。ドキドキする。

私…もしかして？？

『亜…久阿？』

トクン……………

低い実の声。

自然と顔が熱くなる。

『そっそうだけど』

私はドアをあけて実を

精一杯の平常な顔で見る。『見た？？』『見た』

実の見た？？と言うのは

さっきの女の子の事だ。

『…私に告白したくせに』『だってどうせ無理ならって思ってたら

…』

ドキドキする。

『そんなんわかんないじゃん。私だって悩んでるから』『目が見れない。恥ずかしい。』『おいで亜久阿』

言われるままに私はあぐらをかいている実の足の上に座る。チヨコント。

『亜久阿おめえ…』

『じゃあおるー！』『グイツ私が立とうとしたときに
実の手が私を包んだ。』

ごめん。衣宇…

私実が好き…大好き。
だから…衣宇に実は
渡せない。ごめんね。

私は心のなかでそういうと実の腕の中にはいり放課を過ごした。

『ごめんね。衣宇』

教室に戻った私は衣宇に

自分の気持ちを伝えた。

『あーだるかった！！』

『え？？』

『実くんが好きなのは嘘！！だって衣宇わ恋だもん』 『でも好き
って…』

『実くんに協力してって言われたから（、）』

私は安心した。自分の大親友がライバルなのは絶対嫌だから。じゃあ…実にも伝えなきゃ…

—放課後—

ピンポン。

『はい』 実の低いエロイ声。私の好きな声だ。『あつ亜久阿だけど…』 恥ずかしくて声がでない。ガチャツ私服の実は見慣れた姿なのにカッコよく見える。

『おいで』二回目の実のおいで。嬉しい。

『あのね今日は…えっと…』 自然と声が小さくなる。『何？？はつきり言って』

実は顔を近づけてきた。

約三センチ。 “（ひゃあ—…はずい…）” 『こっ告白の返事いいにきた！！』

実は最初ビックリしてたけど正座をしはじめた。なりゆきで私も正座をする。

『いつでもどうぞ』

私の答えは決まってる。

『私でよければ。お願い』

跡（前書き）

もうすぐ完結となりました。早いですね…今回は実の気持ちも載せてみました。

跡

『…まっまぢ??!!』
実は驚きながらこつちを見る。『うん。まぢ（^| ^』私…実となら幸せになれる。…なれるよね？

—高2夏—

実と付き合って一年と半年。『もう付き合って一年ちよつとかあ…』
実がつぶやく。私と実は

お昼を屋上で過ごしていた。『そうだね…なんか…早いや（汗；』

『亜久阿…卒業したら結婚しよう。』

実はいつのまにか正座をしていた。結婚…。実なら…『うん…!!』

お昼を終えて私と実は手を繋ぎながら階段をおりる。実は手をはなし先に行く。『実…?!』『競争（^| ^）v』実を追いかけた私は足元を見ていなかった。

『きゃっ』私は足をもつれさせ階段から落ちた…

『亜久阿!!』実が寄り添うが実の顔も実の声も遠ざかっていく…
ピッピッピッピ

気がつくと私は病院にいた。『…?』起きると頭が痛い。『亜久阿

!!』起きた私の目の前にいた男の子。
誰だ? 見覚えがない。

『あつくああ（（（泣』

衣宇が抱きついてくる…

『衣宇…』

『亜久阿』またあの男の子。誰なんだろう?

『あなた…誰??』私は目の前の男の子が誰かわからない。その男の子は実くんと言った。

—*Minoru*

亜久阿は何言ってるんだ??俺が誰かわからない??

俺はすぐに医者元へ駆けつけた。『説明しろよ!!』医者の胸ぐらを掴み拳を強く握る。『実は—』医者が言うには一部記憶喪失になり俺の事だけ覚えてない。(ふっざけんなよ!!せっかく…約束したのに…でも絶対思い出させる。)

その言葉を強く胸に押し付け、亜久阿のベッドを後にした。『ふい

—』俺は中学生の時に吸っていたタバコを久しぶりに吹かす。

嫌な事が忘れられる。

『ふい—(、)ノ』

その時だった。『みつ実くん…?』そこには亜久阿の姿があった。

“実くん”

前まで呼び捨てだった。

まるで同一人物なのに中身が入れ替わった様に…『関係ねえだろ。

俺との約束なんて覚えてないくせにさ。ふい√』俺は亜久阿をそっけなく言い放した。

—*Aku*

思いだせない…きつと実くんと私は恋人なんだ。確か…今年で一年ちよつと?するとそこにはタバコを吹かす実くんがいた。『みつ

実くん…？『私は実くんをのぞいた。』関係ねえだろ。俺との約束なんて覚えてないくせにさ。』ひどい…私は無意識にそう思った。確かに覚えてない！でも！私は心より体が動いていた。手の甲に熱い違和感。

私は何も考えずに実くんのタバコを奪い自分の手の甲で消していた。『何やってんだ！亜久阿！あとが残るだろ！！亜久阿！！』実くんの声なんて私の耳には届いてなかった。熱い。熱い。熱い！！！！でも…でもそれ以上に胸が熱く、痛い。苦しい。涙が鼻水か訳もわからず泣きながら子供のように話し始めた。『私っは…！！みつ実くんっとの約束っは覚えて…っないっけど』もはや自分が何を言ってるのかもわからない。あいまいまに小さい『っ』が入り、うまく言えない。でも私は伝えなきゃ駄目だと思った。『実くんが好きっだしっ……実くんっの気持ちっがわかる。私っだっって思っい出せっなくてっ…苦っしいっ！！』もう他には言葉がでてこなくて。手の甲のあとは消えない私の現実。乗り越えたい…乗り越えたいよ…

。 *約束* 。

『亜久阿…協会に行かないか？』実くんは急に私に言った。『え？』協会？？何で？？『あ…結婚式場なんだけど…さ。』私たちは結婚するの？？…年齢的に無理なんじゃ…。『何しに行くの？？』不安と期待。

『亜久阿…との約束を一緒に叶えに行く。』そういつと実くんは私の手を無理やりひっぱった。

『みつ実くん！！やめてっ…私たち…何も約束していないじゃない…』私がそういうと実くんは手を離す。

『…のむよ…』『えっ…？？』『頼むから…思い出してくれよっ…』実くんの目から溢れる静かな少ない涙。

その涙もそのうち大粒になって実くんの頬をつたっていった。まるで今まで我慢していたのかのように。

私は実くんをただ見ることしかできなかった。自分でもわからないけれど動けなかったんだ。

その時私の頭に1つ…また1つと思い出が刻まれていくように思い出し始めた…。

実くんと受かった高校の事。実くんのために泣いた事。実くんに告白されて付き合う事になった事。

そして…実くんと約束した。『高校を卒業したら結婚しよう』……。

私は静かに泣いていた。からからに乾いていた口が開く。『みつ…みの…る？？？？』

実は私のほうを思い切り向いた。『亜久阿…思い出したのか？？？』

実は私をお姫様だっこして私の家に向かった。今は午後20時。親がいる。

『ちよっ?! 実!!!』 あっという間に私の家についた。ガチャ。

実は私をお姫様抱っこしたまま親に話し始めた。『亜久阿さんを俺に下さい!!!!!!!』

無論。門限過ぎている&この状況。お父さんがうなずくはずがない。『なっなあんなんだあああ!! 君はああああああ!!!!』

大声で怒鳴るお父さん。『実!! 上行こうっ』 そういうと私は怒っているお父さんを残して

実と部屋へ向かった。『ちつくしよー! 俺の何が駄目なんだよー!!!!』

実はすねながら怒っていた。『あの状況だったら誰でも「うん」なんて言わないよ。もー落ち着きなよ。』

『だっだって! 早く亜久阿と家族になりたいんだよ!!??』 実はサラッといった。

『しょうがないでしょ。でも高校卒業したら。っていう約束なのに? まだ2年生だよ?? 約束はまもりなさい。』

私はそいいながらベットに座る。『今日は泊まっていきなよ?? どうせ明日からゴールデンウィークだし。』

『それって...?? 誘ってる??』 実は真剣なまなざしで私を見つめる。

『はあ??!! 違うに決まっでんでしょ!! 勘違いするな!! 2人は今日だけ!! 明日は衣宇と恋くんを呼んで』

皆でお泊りするの!!!!! 私には怒りながら実を甘くにらむ。すると実もすねてにらみ返し、

『ちえっ。まあいいや。』 そういうと実わ下に降り、帰ろうとする。

『あれ?? 帰っちゃうの??』

『違う! 帰る訳ねーだろ。荷物とりにいくんだよ。ゴールデンウィーク中の分。金もな。』

そついうと実は私と手を繋ぎ実の家に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0089i/>

Jewely-宝石-

2010年11月11日19時11分発行